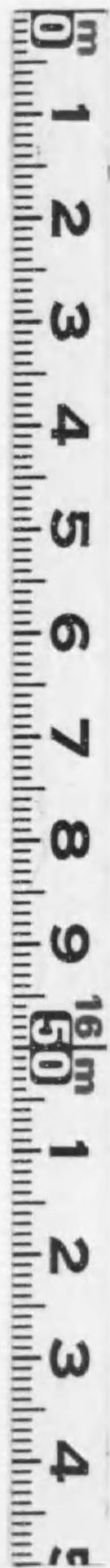
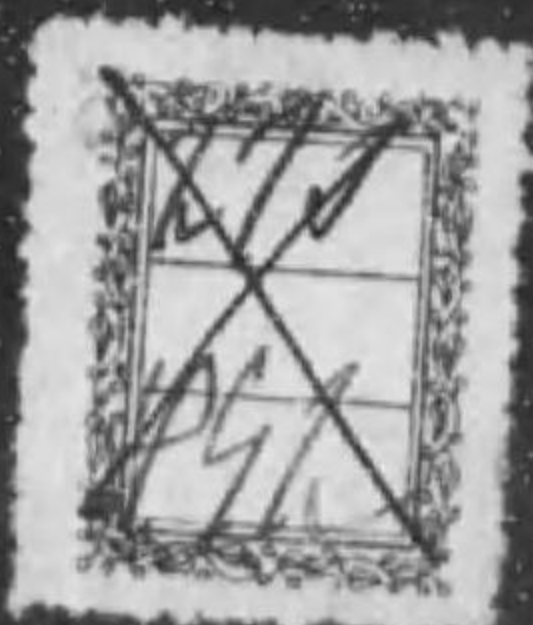


特116

706

漢路
教下僧
吉野寺
苑古鼓
錦戶

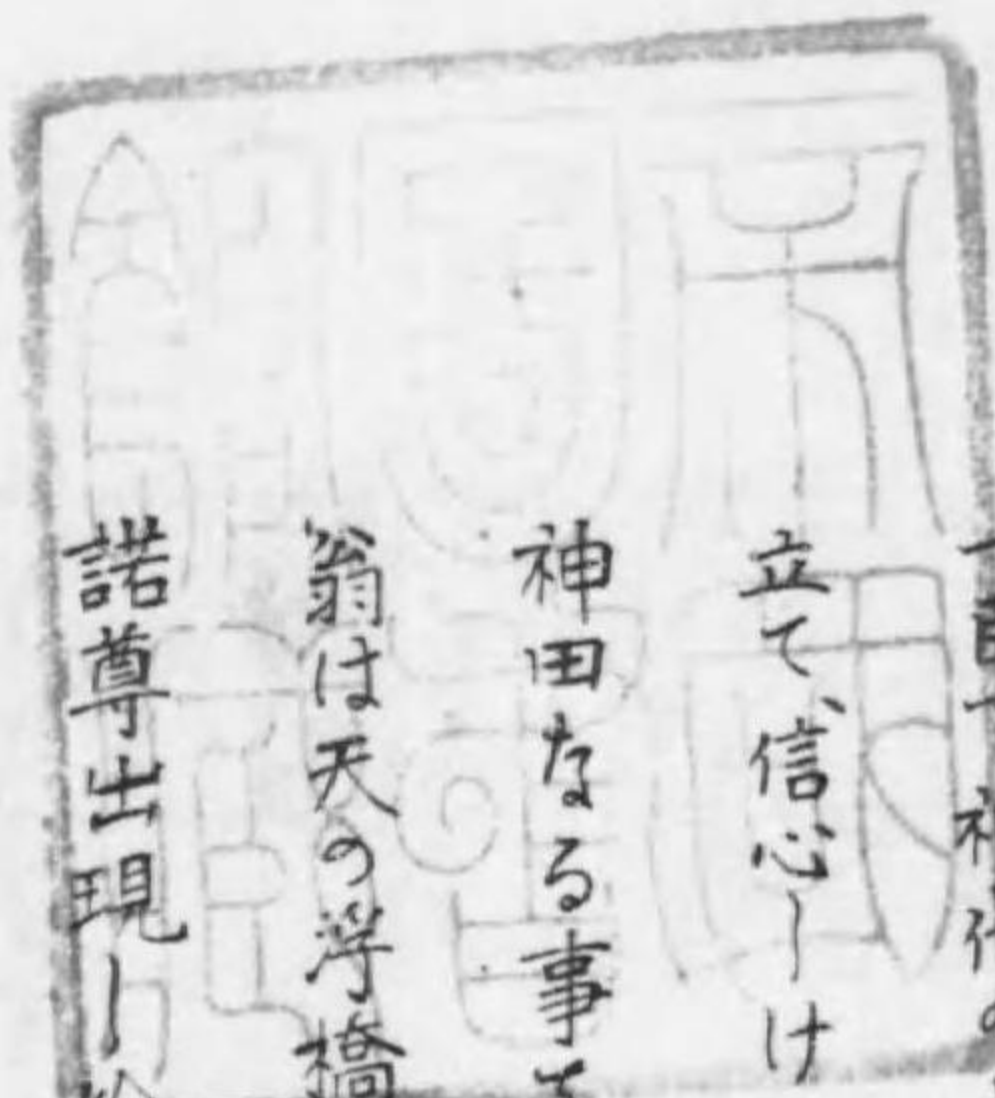


始



白宗不家
觀十世
心之

706
706



淡路 概説

別能一卷ノ一

一臣下神代の古跡を尋ねんとして淡路國に渡りけるに、小田の水口に幣帛を
立て、信心ける翁と田作る人あるを見、言葉をかけて此の田が當社二の宮の御
神田なる事を知り、更に當社の來歴、伊弉諾伊弉册二神の功業を聞きけるが、
翁は天の浮橋の昔の様を現さんと云ひて二人共に姿を隠しぬ。や、ありて伊弉
諾尊出現し給ひ、神代の昔天の浮橋に立たせ給ひて滄海を天の瓊鉾もて探り
磯取盧島を生み給へる状を示し、大八洲の萬代に榮ふべきを祝し給ひけり。

大正
10. 4. 21
内交



此曲総じてサラリト謡フベシ

後シテ	伊特諾尊	半切 腰帶 扇	面天神 黑垂 透冠 鉢巻 着附厚板 拾狩衣	前シテ	尉	面小牛尉 尉髮 着附小格子厚板 茶紐水衣 白大口 鞍子腰帶 尉扇指 柄振持	ツレ	男	着附無地熨斗目 浅黄縷水衣 白大口 腰帶 扇指シ 柄振持	ワキ	二人	從者	大臣烏帽子(赤上頭掛) 着附厚板 拾狩衣 白大口 腰帶紋付 扇 大臣烏帽子(菊黄上頭掛) 着附厚板 赤拾狩衣 白大口 腰帶紋付 扇	役別	大臣
								曲柄	三	季					
(目番初) (能弱)				準				高	等	淡路國三原郡根列村 淡路國和大多幡神社 神魂國和大多幡				所	

淡路

觀阿彌清次作

ワキ大臣
早シレ二人
眞次者上
拍子三合

治まる國の始もや。治まる國の始もや。
 淡路の神作。なるらん。それとも
 これの當今に仕入奉る。後下あり。
 さてもわれ宿願の子細あるはより。
 住吉玉津嶋に集宿仕りてゆ。又
 よきついであれば。これより淡路の

の裏に作田のあめつちらるれを
 憫して千里萬里の外までも
 皆樂める時とかや頃も今も
 長閑ある心の池のいひかたま
 春の気色も横ぐらう春の田を
 人に任せてわれの人には任せて
 われの人を花に心の憧る盛に

○小謡

ひかれて苗代の水に心の種まき
 て教ればともや桜田のあとも
 かくす。気色が丘雪ともかくす氣
 色かあ。いかにこれある翁に尋ね
 べき事あり。おとこの風情と見
 るに小田をわへあから水口に幣
 帛と立て真に信心の氣色あり。

かま^{カシ}當社は二の宮にてま^マませ
ばとして。國中^{クニナカ}二の次第^{イナヒニ}にあらず
ツカ^{ツカ}ル上^{ウヘ}に當社の神^{カミ}達二柱^{ニハしら}の社の
心^{ココロ}殿^{ノミヤ}あれば。二つの宮^{ニツノミヤ}居^イとそ
ま^マにて。二の宮^{ニノミヤ}と崇^{アガ}めなるあり。
ツテ^{ツテ}上^{ウヘ}に伊弉諾^{イサノ}伊弉册^{イサノ}の尊^{ミコト}
の二柱^{ニハしら}の神^{カミ}侍^シのま^マに宮^{ミヤ}居^イと給^{タマ}

み^ミ淡路^{ワタジ}の國^{クニ}の神^{カミ}は一^{ヒト}ま^マう宮^{ミヤ}居^イ
は二^ニつの宮^{ミヤ}と崇^{アガ}め申^{マウ}すあり
ツカ^{ツカ}ル上^{ウヘ}によ^ヨくよ^ヨく聞^クけ^ケば有^ア難^{ガタ}や。さ^サとて
か^カる國^{クニ}土^{ツチ}の種^{タネ}と。普^ツく受^ウくるに
恩^{オン}徳^{トク}た^タこの神^{カミ}の誓^{チカエ}よ^ヨあり
事^{コト}新^{アタ}ら^ラし^シま^マは後^{ノチ}か^カる國^{クニ}土^{ツチ}世^ヨ界^{カイ}や
萬^{マン}物^{ブツ}の^ノ出^デ生^{シヨウ}あ^アま^マね^ネま^マは神^{カミ}徳^{トク}た^タ

〇小説
 種蔣ツレミツくシテと用カニ讀ヨみ 伊蔣ツレ上冊ニと書カい
 ての種シテと收ヲサむ 引ツレカれ目ニ前ニの御
 誓シテあり 引シテの上ニ神ノ代ノ遠ニからず
 今日ツレミツの前ニはも 引シテ入ニせよの種ツレミツと
 蔣マトルまキ種トと收メて 苗ナハ代ノのキ種トと收メ
 されツレカる上のサラリ 然シれバ用ニ
 けテ天地アメツホの伊蔣ツレ上諾ニと書カいてハは
 種蔣ツレミツと書カい

めて苗ナハ代ノの氷ヒうラらハてハ春ハル雨アメの
 あハめトよりク降クれル種ト蔣マまキてハ國クニ
 ぶトもト豊ユキにハ千チ里リ禁カむル富トク草クサ
 の村ムラ早ハヤ稻イネの秋アキにハあラなラハ種トと
 收ハめシん神カミ徳トクあラ有アル難ニの誓チカや
 あラ有アル難ニの神カミの誓チカやあ 伊蔣ツレ上
 あラ及ツ當トク社ノの神カミ秘ヒ懇コに御ミ物モノ語コトり

此の御代にて

事かよふ。凡そこの鴻始めて大八
洲の國と作り。紀の國伊勢志
摩日向並に四つの海岸と作り。
出た日神月神蛭子素戔彥等
す。地神立代の始にて皆この時
に出現。中にも皇孫の日向の
國に天降り給ひて。地神等四の

火々出見の皇子と出まはせ。有
難き代々とかや。天下とたもち
給ふ事すべて八十三万六千八百
餘歳あり。かゝるめでたき皇子
達に御代と譲。崇の権現と顯
れおはします。伊弉諾伊弉册
の神代も唯今の國土あるべし。

天啓

ロギ上 朗カニサラリ

げに神の代の道直に今も妙なる秋津洲
の君の清影ぞありかたき
清影ぞと夕日隠の雲の端に
たかびく天の浮橋の古と現
て御客人を慰めん
橋の古と聞かぬいかなる言の

シテ上 用ル心

早三上 待謡 切迄難子

葉のそこの神歌の鳥羽玉の神
黒髪も乱れず結ひ定めよ小夜
の手枕の歌の種蔭まき神と
も今は白波の淡路山と浮橋
にて天の戸と後り失せおけり
天の戸と後り失せおけり
げに今とて神の世のあけに今と

申入間

ても神の世の清業はあらたあり
 けりといへば虚空に夜神樂の月
 に照えて光さす。氣色こそあらた
 ありけるや。氣色こそあらたありける
 わたづみのかざりに挿せる白玉の
 彼もて緒へる候。踏踏。月春の夜も
 長閑ある。翠の空も澄み渡る。

後シテ伊弉諾尊上ニ因カニ

出端
拍子ニ合ハズ

天の浮橋の上よりて八洲の國
 を求めえし。伊弉諾の神との神カ
 事あり。治まるや國常立の始より
 七つ五つの神の代の周末の今に君
 の代より和光守護神の扱桑の
 帝國の風吹けども山の動せず。神舞
 げに有慈ま御。おき。げ。ふ。有。慈。ま。御。

ロンギ上
拍子ニ合

天の

誓々ももろも天の浮橋のその出
 可^{シテ上}はさる^{シテ上}にてもいかなる^{シテ上}所あるらん
 あり下げ^{シテ上}り銚^{シテ上}の清露^{シテ上}ろりて
 鳴とあり^{シテ上}と淡路^{シテ上}もこえつけし
 ぞぞ浮橋の下^{シテ上}あらん^{シテ上}げにこの
 鳴の有様^{シテ上}東西^{シテ上}の海^{シテ上}侵々^{シテ上}として
 南北^{シテ上}に雲峯^{シテ上}と列^{シテ上}ね^{シテ上}宮殿^{シテ上}にか^{シテ上}

○仕舞

〇祝言小謡
 る浮橋と^{シテ上}三^{シテ上}ち渡り^{シテ上}舞^{シテ上}み雲の袖^{シテ上}
 舟^{シテ上}の舟^{シテ上}銚^{シテ上}の手^{シテ上}所^{シテ上}あり^{シテ上}引^{シテ上}く^{シテ上}の^{シテ上}舟^{シテ上}
 の時^{シテ上}つ^{シテ上}凡^{シテ上}治^{シテ上}まる^{シテ上}の^{シテ上}波^{シテ上}の^{シテ上}蘆^{シテ上}原^{シテ上}の^{シテ上}國^{シテ上}
 富^{シテ上}み^{シテ上}民^{シテ上}も^{シテ上}ゆ^{シテ上}た^{シテ上}か^{シテ上}に^{シテ上}萬^{シテ上}歳^{シテ上}と^{シテ上}う^{シテ上}た^{シテ上}ま^{シテ上}
 松^{シテ上}の^{シテ上}聲^{シテ上}千^{シテ上}秋^{シテ上}の^{シテ上}秋^{シテ上}津^{シテ上}洲^{シテ上}依^{シテ上}まる^{シテ上}國^{シテ上}
 ぞ^{シテ上}久^{シテ上}し^{シテ上}の^{シテ上}治^{シテ上}まる^{シテ上}國^{シテ上}ぞ^{シテ上}久^{シテ上}し^{シテ上}ま^{シテ上}。

〇祝言小謡

上

下

放下僧

概説

別能一卷ノ二

下野國の住人牧野左衛門といへる者、相模國の住人利根信俊と口論の末討たれけるを、左衛門の子小次郎無念に思ひ、敵を討たんと、其の兄にして禪家の僧となれるものと相謀り、當時流行せる放下僧の姿に変装し、信俊が三島明神に参詣せるを機とし、其の旅舎に赴き、巧みに其の席に入りて初めの程は禪學の問答を試み、又飄逸なる小唄などうたひ、何氣無き様にて隙をうかゞひるたが、突如走り寄りて本望を達しけり。

此曲前ハ多少心持アレド総ジテサラリメニ後ハ詞ニ心シテ謡フベキナレド他ハ凡テ淀ミナクサラリト謡フベシ

後ツレ	後シテ	ワキ	前シテ	前ツレ	役別
牧野從者	前シテト全シ	利根信俊	牧野小次郎、 兄僧	牧野小次郎	
紋付腰帶 太刀	梨子打鳥帽子 色鉢巻 着附厚板 白大口 側次	男笠 太刀	着附厚板 白大口 掛素袍 腰帶 小刀 扇	着附殿敷斗目 素袍上下 小刀 鎮ノ扇	装束 東附
			角帽子 着附無地殿斗目 水衣 腰帶 珠敷		
					季 九 月
					所 前野下 後 國 櫻村 瀬浦六 津金部岐良久 社 社 社
					曲柄 替古頂
					級 二

放下僧

禪竹氏信作

ツレ男向サラリ
カモウにハ者ハ下野の國の佳人牧野
の左衛門竹某カ子に小次郎と申す
去はてハ。さても親はてハ者ハ相
摸の玉の佳人。利根の信俊と申す
去と口論。会あう討たれてハ親
の敵はてハ種に討たむやと好むじ

放下僧

ひとども。敵は猛勢マウゼイわれらはた
 一人イチニンにての同思トウシみにかひあくる月日ツキヒと
 送りオウリの又また兄ケイにての老の幼エウあより出
 家ケはりあたり近チカの會エ下カにての餘ヨ
 りに便ベンもあくる同トウ立ち起タチえこの
 事コトと談タン合カせばやとあどアトのカに
 案内ナンイ中チュウしの誰ナニにて渡ワタりのゆぞ

果ツレサラが来キりてのシテかカけ方カタへ渡ワタりの
 きて唯タカ今イマは行イキのためは来キり終ハシひ
 てゆぞツレサラの唯タカ今イマと事コト餘ヨの
 儀ギにあらず。われらが親ナクキの敵トクの事
 討ウチたぢやとは海ウミじゆども。敵トクは
 猛マウ勢ゼイわれらハはた一人イチニンにての程ハジに
 思オモひにかひあくる月日ツキヒと送りオウリのあは

シテ用カニ
 れ法共モロトモに思しめし御立ちゆかし
 作シテ用カニの充ツルにてゆども。われらが事ゆ
 幼エマセウ少シエツより出家シエツの身ツレカウテサラリにてゆ程イよ。今
 更ツレカウテサラリいかゞにてゆ 清イ意イはさる事にて
 てゆども親の敵ツレカウテと討シテカウテたぬ志ゆ不
 孝カウの由シテカウテと申し作シテカウテ 志シテカウテて親の敵と
 討ツレつて孝カウに供ツナつたりたる事ゆゆか

ツレカウテ
 なかあかの事物語 確カリ。唐土モロコシの事ツレカウテにやあり
 けん母ツルと兇虎手強クにとられ。その敵と
 さらんツルとて百モ日カ虎トラ伏フす野ツル辺ベにて
 出ネラて狙ネラみある夕ツル暮カニに尾オノ上ノの松ツルの
 木ツルかくれよ虎トラに似ニたる大タイ石セキのありし
 と敵テキ虎ツルと思ツクひ番ツクへる矢ツクあれどよあ
 びいて放ハナつ。この矢ツク即ツクち巖イハホに立ツクち。

確カリ

タチマチ

気ヲカハサリ

カウ

忽ち血流れけりとなり。これも奈
 の心深きはより。聖まの石にも文の
 立つと申しゆは。な思しめし御
 立ちゆへ。これの面白き事と引いて
 承りゆものかな。このふは徳共は
 思ひ立たうずるにてゆ。越るまうゆ
 シテカウツテ
 こそかの老は。何行とて。越つま

ツレサセ向アトリ因カニ

ゆべきの。果きつと。案が。出たりたる事

ヒエヲカハ

モテアツ

ハツカ

カニ

のゆ。この頃人の。驚びゆの。教下にて
 の程は。果の。教下にて。ありゆべ。御身
 の。教下。傍に。御ありゆへ。かの。老。禪法
 には。好きたる。由。申しゆ程にて。採法と
 作せられう。するにてゆ。げは。これの
 面白き。了。簡にてゆ。さら。わが。かて。思ひ

シテウケテ

ヒエヲカハ

立たうするにての ツレサリ 心にての ツレサリ
 さらばと思ひつゝ行跡の姿は身とや ツレサリ
 つせぬ ツレサリ われも嬉しく思ひつゝ放下
 の姿に出でて立ちて シテ こそすこそこと
ツレ 立ちいつる 上音 古里の サリト 名跡も サリト こそ 明カニ 有
拍子合 切の オノ 名跡も サリト こそ サリト 有 サリト
 ながらあから ハルニ 命ぞ ハルニ 限り ハルニ 兄弟 ハルニ の

神 カ 心 コ と ヤ 頼 ト む ラ ん 神 我 ガ 心 コ と ヤ 頼 ト む ラ ん 神 我 ガ 心 コ と ヤ 頼 ト む ラ ん 神

次 信 信 後 後
 歩 ア と 運 ぶ 運 神 神 垣 垣 や 歩 と 運 ぶ 運 神 神 垣 垣
 や 隔 て ぬ 指 指 を 頼 ま ん 互 の 相 摸 摸 の 國

の 信 人 人 行 行 根 根 の 信 後 後 と ヤ す 者 老 老 心 心 にて
 ね わ れ こ の 向 打 打 ら つ ぎ 夢 夢 夢 心 心 あ く る 心
 程 に 漸 漸 戸 戸 の 三 鳩 鳩 へ 集 ら ば や と ぬ じ の

後シテサシ上 朝カニ伸シベリ
一セイ 拍子ニ合ハズ

面白のわれらが有極やお像俗ニつ
の道と離れ姿詞も人子似ぬ
振舞と隠家と。思ひ捨つれば安
子身と。知らずであどかひ迷ふらん
落気一陽の春と知らず。白雲青山
に蔽ふとか。流水山上の秋行て
紅葉と争ふいはれあり。朝の嵐

○小謡

シテ二人上 寛タリト大キク
一セイ

夕の雨朝の嵐夕の雨。又明日の
昔ぞと夕の露の村。雨定あま世に
みる川の氷のうたかたわれいかよ人を
あだよや思みらん人とあだよや思み
らん。いかは中しゆ方々の名の行と中
しゆぞ。浮雲流水と申しゆ。又あれ
あま人の名とべ何と申しゆぞ。風雲

文下書

流水と申しゆシテいかに某の浮雲シテあれ
 なる者の流水にてゆシテ又あれある御
 方のゆ名字とべ行と申しゆシテそ
 苦しからずゆシテたご放下がまゐりたると
 御申しゆへワキ内カシテいかに面々シテに不審申し
 度き事ゆシテあゆワキサアリ凡そ妙門の
 形と云つバカタチ十カジフの珠教リキと手に纏マツひ。

悪辱二諦の衣ニと恙キ罪障シヤウ懺悔サシの袈
 裟サと掛けてこそ僧と申しゆシテ申すべけれ。
 異形イの出立イデ心得コチず依ヨ。又見ミ中ナカせ
 へ拄杖シユに團扇ダマウと添ソへて持テたれたり。
 團扇ダマウのイるツクあり度シテくゆシテこれシテ團扇ダマウと
 申すゆシテ動くウ時トキにシテ清セイ風フウとシテあハ。静シヅカ
 ある時トキのイ月ツキとシテスス。昭シロ白ハク法フツ風フウたタ。

動せうの内カル上にあれば法ホフ法ホフと心シンが可レ作サ
 してカル上眞シ實ツ修シ行キの便ベにてカわれら
 甲カ持チつツの道ダウ理リありリとカあア終シみミぞゾ愚ウ
 なるコト。圓ワキ扇のの一面ハ白クうハ今イ今ニ入リ
 小カろク矢ヤとキ常ジョウ一ニ終シみミらウもモおオ僧ソウの道ダウ
 具グゴウうウかカそれレらウと申すハ本ホ末マは
 烏カ兔ウの姿と象りノ日ヒ日ヒとこに表しス。

淨ジ穢ク不フ二ニの秘法ホフと表すハされバ愛アイ深シ明メイ
 王ワウの神通ジュウのろと張りノ方ホウ便ベの矢とつまマよ
 つツてカ四シ魔マの軍と破りノ終シみミされバわれ
 らレもモこれレと持らウられバわれレらモこれレと
 持チらテ。引ヒカキぬル。放ハさスぬル矢ヤにて射るハ時トキ
 の當らズ志シもモ外ソトさシりケりトカハヤ
 りリて詠むハ歌カもモありリ知チらズおオ物モノを宣

此より知らずか物互宣ひそ、
 下僧の何れの祖所禪法と御傳へ
 ぞ。面々の宗體が承り度くハ
 カ宗體と申すハ教外別傳にして
 之も言はれず説くも言はれず言ふ
 に出だせん教にあら。文字と立つれば
 宗體に背くハ一葉の翫る風の子

方と出候せよ、
 げにげに面白うハ

こそ高禪の公案行し心得ゆべき

入つての幽玄の感に動し出てハ三昧

の内に遊ぶ、
 自身自佛のまていかた

白雲深き前金龍躍る、
 生死に任せハ

輪廻の苦生死と離れば、
 新あんの科

こそ向上の一路のいかふ、
 切つて三段

とあす シテカケテ強ク確カリ 暫く切つて三段とあす

と度 カハル上心モキ強ク 禪法の詞あると お騒ぎある

こそ愚あれ 勢ヨクサラリ 何となくふかあはよ

いばでの山の志躰 勢ヨクサラリ 踏色には出で

。南無三寶とかりの人の心 物著 わ

ふれば大小の根機と嫌はず持戒 在言

破戒と選はず有無の二偏はあつ

○サレ由独り
○小説留連雜子

○仕舞

る事あく皆成佛するため

あり シテ上明カニ かるが故に草木も法身の

姿と現し柳の緑花は紅あるその

色々を現せり サレ由 青陽の春の

朝にの各の戸出づる雪の凍れる

候とけそめて雪消の氷のうた

かたよ サレ由 榎宿する蛙の聲耳聞けバ

心のあふもめと目にはぬ秋を風
 聞きた秋の地よそよく古里の田面に
 落つる雁鳴きて指の雲の夕時
 雨妻恋ひかぬ小牡鹿のまたすむ
 月と山にんて指と忘る思あり
 うらの湊の釣舟の魚と得て登と
 捨つぞれとんれと聞く時の嶺の

○小歌留連頭○

シテ上朝カニ

風や谷の聲夕の煙朝かすみ
 於に界唯心のわありと思し
 め心と悟り絵へわ月のためには
 浮雲の種と心やありぬらん
 面白の苑の都や筆に書くも及ば
 東にの祇園清水落ちくる流の
 音羽の嵐に地主の梅の教り教り

○小歌独吟
○仕舞ヨク○
○拍子合ヤラハ

シテ伸シテ暗ヤカシ

地サ用ル心

シテ上朝カニ

拍子合ヤ

羯鼓カ上

西の法輪^{フツリン}、碓氷^{ウヅヒ}の御寺^{ミツラ}廻らば廻れ。氷^ヒ
 車の輪^ワの臨川^{リンセン}堰^ヰの川^{カハ}波^ハ行^{ユキ}柳^{ヤナギ}の氷^ヒ
 にもまるる。志^シたりやあまの所^{トコロ}にもま
 る。さら雀^{スズメ}の行^{ユキ}にもまるる。都^{ミヤコ}の半^ナ
 軍^{イクサ}にもまるる。茶^チ白^{ハク}の挽^{ヒキ}木^キにもま
 る。げにまこと志^シれたる。とまよこま
 りこの放^{ハナ}下^ゲにもまるる。筑^{ツク}子^コの二^ニつ

二^ニつの竹^{タケ}の代^{カタ}々^々と重^{オモ}ねておち落^{オチ}まり
 たる清^{キヨ}代^{カタ}かあ。^{シテツレニス上手強クサラリ}
 べさし。兄弟^{ケイテイ}ともには扱^{アツ}まつれて思^{オモ}
 敵^{テキ}にまゝり零^コりこの年^{トシ}月^{ツキ}の怨^{ウラミ}の
 来^キ。今^{イマ}こそ通^トれ願^{ガネ}のまゝに敵^{テキ}とぞ
 討^{ウチ}つたりける。かくて兄弟^{ケイテイ}念^{ネン}力^{リキ}
 の。かくて兄弟^{ケイテイ}念^{ネン}力^{リキ}の。その期^キのあり

て忽ち^ニ親の敵と討つ事も^カ存^ル
 行^ハ深^キ故^ニより^テ名^ヲと^シ事^ヲ行^ハに^テ留^メ
 けり^ト名^ヲと^シ事^ヲ行^ハに^テ留^メけり^ト

吉野静 概説

別能一卷ノ三

頼朝義経の仲不和となり、義経は都を落ちて吉野の山深と逃げ入りしが、吉野の衆徒心変りして義経を襲はんとしぬ。佐藤忠信其の追撃を緩うせんが為め都道者に假装し、衆徒會議の席に入り、種々の問答をなして時を移さしめ、又静御前に出會ひて法樂の舞を舞はしめ、其の唱歌を借りて義経が神を敬ひ、朝家を尊び、忠勤を擢んでしことも告げしめしが、其の歌舞の妙なりし為め、衆徒は時刻を遷延し、其の間に義経は遠く落ち、忠信は都に歸りけり。

落ちありたるを申し仰^{ワキ}十二騎と
 こそそ承^{狂言}つてゆへ十二騎あらば
 追^{ワキ}つかけ討ちあやさる^{ワキ}暫^{ワキ}く
 十二騎とやすとも。餘^{ワキ}の勢^{ワキ}百騎二
 百騎にも向^{ムカ}みべ^{ムカ}かやうに申す所
 郊^{サウ}の者^{サウ}當^{サウ}山^{サウ}と信^{シン}じま^{サウ}ふ^{サウ}い^{サウ}か
 も所^{テラ}寺^{テラ}も宿^{シユク}坊^{バウ}も難^{ナン}あ^{ナン}く^{ナン}お^{ナン}そ^{ナン}ま

○小談

せか^カと思^カ入^カぞかやうに申すなりこの
 上^ウの^ウも^ウか^ウく^ウも^ウ御^ミを^ミか^ミら^ミひ^ミぞ^ミ吉^キ野^ノ山^{ヤマ}
 野^ノ山^{ヤマ}御^ミを^ミか^ミら^ミひ^ミぞ^ミ吉^キ野^ノ山^{ヤマ}あ^ミま
 申^シ事^{コト}傳^ツれ^ツ聞^クえ^クあ^ク判^ハ官^{カン}の^ノ後^ノの^ノと^トか
 め^メも^メ恐^コし^コや^コ御^ミ眼^{ガン}や^{ガン}し^{ガン}ゆ^{ガン}ん^{ガン}御^ミ眼^{ガン}や^{ガン}し^{ガン}ゆ^{ガン}ん
 さ^サそ^サも^サ靜^{シユ}か^{シユ}の^ノ忠^{チュウ}信^{シン}が^ガそ^ガの^ノ契^{ケイ}約^{ヤク}と^ト違^{チガ}へ
 とい^ト舞^マの^ノ装^{ソウ}束^{ソク}ひ^ヒま^マつ^ツく^クろ^ロひ^ヒ忠^{チュウ}信^{シン}

シテ靜カ^{シテ}ル^ル上^上
 拍子^{ウチ}合^{アヒ}六^ムツ
 會^{クワイ}釋^{シツ}

カル上
 ツツ合
 六ツ

拍子合

用カ

通しと侍ち右たり。これの都道去
 いての法樂の舞の由承り。下向道
 と志れてのやまや舞と始め給みべし
 都の人と聞けばあつがや判官御道
 せばまき事。世の上の聞えいかあるぞ。
 教人こそ教べけれ。終はの御中
 直らせ給みべしと。聞くより人ぞ先非

と悔いて管々畏れやすなり。
 シテカウツテ
 引ての嬉しや委しくも知らせ給み
 べし。か都へあまりに事延び時移りぬ。
 カル上
 心得強へ舞の袖げはあう詞多ま
 老のふ少あ。かやうにわれら言の
 葉過ぎのあかあ人も怪みてもし
 もそれとかえ吉野の。かつて知ら

地ウケテ神ビビカリ

すか 静にさやせや静か
衆後も時刻や移すらん
神こそ

納受ましますらぬ
げはりの所代

○サ曲独吟
○切迄雅子

も静かまひ
然るにかの判官は

祚道と重んじ朝家と敬ひひと

へ忠勤を抽て私の意さらば

あへん換へ申すとも神は正

○仕舞

真の頭も宿り終みあれど静か舞

の袖に物くうりおをりま
我が

君と身り終へと祈るぞあれあり

けりもろも景時かその換言

のみあかみと思へむ渡邊や流

る水に満ち潮の逆櫓立てんと

浮船の揺唇が申事よも順義

にていさう中、されば義經のすまは修
め、三吉野の神の誓の真あ
らば、頼朝も聞しめし、直され義
經、執節の勅を受け、洛陽の西
南、これ分國とあさべ、さあらば當
山の衆、後悉く集落し、歸依湯作
の御袖に、惠をいだまひ、給みへしあ

兵かして、不忠あり、終みお御科の
は、ト、^{シテ上 朝カミ}衆後中には、あは憤
深うして、^{日サラソコ}進みて、退つかけ、給
とも、その名聞ゆる人ぞと、討ちと
め申さへは、行國増尾、鷲の尾
さ、忠信は、並びなま、^甲精兵ぞ
人々に、防まゝ射られ、給みあは、語

言予事

五

れべげみは象後中シテ中ノ用カニに進む入こそ
 前シテ中ノ用カニかりけれシテ中ノ用カニ時シテ中ノ用カニやうづシテ中ノ用カニ
ワカシ時シテ中ノ用カニやうづシテ中ノ用カニ時シテ中ノ用カニのシテ中ノ用カニ苜シテ中ノ用カニ環シテ中ノ用カニ探シテ中ノ用カニりシテ中ノ用カニかへシテ中ノ用カニ
ワカシ昔シテ中ノ用カニとシテ中ノ用カニ今シテ中ノ用カニはシテ中ノ用カニあシテ中ノ用カニすシテ中ノ用カニよシテ中ノ用カニしシテ中ノ用カニもシテ中ノ用カニかシテ中ノ用カニはシテ中ノ用カニあシテ中ノ用カニまシテ中ノ用カニ
ワカシりシテ中ノ用カニはシテ中ノ用カニ舞シテ中ノ用カニのシテ中ノ用カニ面シテ中ノ用カニ白シテ中ノ用カニさシテ中ノ用カニてシテ中ノ用カニ時シテ中ノ用カニ刻シテ中ノ用カニとシテ中ノ用カニ後シテ中ノ用カニとシテ中ノ用カニ
ワカシ進シテ中ノ用カニまシテ中ノ用カニぬシテ中ノ用カニもシテ中ノ用カニあシテ中ノ用カニりシテ中ノ用カニけシテ中ノ用カニりシテ中ノ用カニ又シテ中ノ用カニはシテ中ノ用カニ判シテ中ノ用カニ官シテ中ノ用カニのシテ中ノ用カニ
ワカシ武シテ中ノ用カニ勇シテ中ノ用カニにシテ中ノ用カニ恐シテ中ノ用カニれシテ中ノ用カニてシテ中ノ用カニよシテ中ノ用カニりシテ中ノ用カニ義シテ中ノ用カニ經シテ中ノ用カニとシテ中ノ用カニばシテ中ノ用カニ

おとやせと詮議とシテ中ノ用カニかシテ中ノ用カニみシテ中ノ用カニるシテ中ノ用カニ象シテ中ノ用カニ後シテ中ノ用カニ
 もシテ中ノ用カニあシテ中ノ用カニりシテ中ノ用カニけシテ中ノ用カニりシテ中ノ用カニ時シテ中ノ用カニ後シテ中ノ用カニつシテ中ノ用カニてシテ中ノ用カニ
 主シテ中ノ用カニ君シテ中ノ用カニもシテ中ノ用カニ今シテ中ノ用カニはシテ中ノ用カニ忠シテ中ノ用カニ信シテ中ノ用カニがシテ中ノ用カニだシテ中ノ用カニかシテ中ノ用カニりシテ中ノ用カニこシテ中ノ用カニとシテ中ノ用カニにシテ中ノ用カニ
 てシテ中ノ用カニ難シテ中ノ用カニなシテ中ノ用カニくシテ中ノ用カニさシテ中ノ用カニらシテ中ノ用カニかシテ中ノ用カニにシテ中ノ用カニ落シテ中ノ用カニしシテ中ノ用カニ申シテ中ノ用カニしシテ中ノ用カニつシテ中ノ用カニ心シテ中ノ用カニ
 頼シテ中ノ用カニにシテ中ノ用カニ願シテ中ノ用カニ成シテ中ノ用カニ就シテ中ノ用カニしシテ中ノ用カニてシテ中ノ用カニ都シテ中ノ用カニへシテ中ノ用カニとシテ中ノ用カニりシテ中ノ用カニてシテ中ノ用カニこシテ中ノ用カニそシテ中ノ用カニ
 歸シテ中ノ用カニりシテ中ノ用カニけシテ中ノ用カニれシテ中ノ用カニ。

籠太鼓

概説

別能一卷ノ四

九州松浦の何某の召し使へる閑清次といへるもの、他郷の者と口論の末、其の者を
 殺害しぬ。因りて入牢せさせけるが、一夜牢を破りて遁走せるより其の妻
 を招きて清次の行方を訊問せしも知らずとて容易に実を吐かざるにり、
 清次の所在不明に及ぶまで、夫の身代りとして入牢せしめぬ。妻は思ひのあ
 まり狂氣の態にて牢中に懸けたる鼓を打ち慰める様の可憐なるより、
 夫妻共に赦免すべき由を告げしに、妻始めて夫の所在を明し、尋ね行
 きて睦しと一生を送りけり。

此曲ニテハ賤シキ心ニテ誦フヲ宜シトス全体ハサラリト粘ラヌ様誦フベシ

シ テ 關 清 次 妻	ワ キ 松 浦 某	役 別	装 束 附	季
			梨子打鳥帽子 白鉢巻 着附厚板 上下長直垂 込大口 小刀 太刀 扇	不
			面深井 鬘 無色鬘帶 着附摺箔 無色唐織 扇	定
				曲 柄
				(目番三器) (目番四)
				三
				級
				浦松園前肥
				所

籠太鼓

世阿彌元清作

羊男ウツメノヲ内確ウツメノカリ
 引ヒキれレのノ丸マ竹タケ松浦マツウラのノ行ユキ某ガシはハてテひヒ。さサてテも
 集ツカるルしシ使ツカひヒひヒ開セキのノ清セイ次ジとトやヤすス志シ。
 他タ郷ガクのノ者ガとト口ク論ロ。念ネ々々うウ敵テキとトバ
 討ウつツてテ作サりリあアかカらラ科ト人ガニシのノ事シに
 てテひヒるル。やヤかカてテ字ジ者シヤさサせセてテひヒ。かカのノ志シ
 大ダイ剛ガウのノ者ガはハてテひヒるル。番バンのノ事シかカたタく

中しつけざむとあじゆいかに誰か
 ある^{狂言}△御前には^{ワキササリ}かの老犬^{ガク}剛の老
 よてある同番の事かたくはりのへ
^{狂言}△畏つてゆい^イかやかし上げゆ清次^{ゴウ}か今
 夜牢^{ラウ}と破り^ム抜け^テゆ^{ワキササリ}何と清次^{ゴウ}か
 牢^{ラウ}より^ム抜け^タると^ムやす^ムか^{ゴウ}言^ゴ語^ゴ道^{ダウ}
 新^{ダン}の事^{コト}こそ^ムて^ム以前^{イゼン}より^ムか^ムたく^ム申^ム

しつけてあるむむうよ油断^{ユダン}はりて
 あるぞ^{ケラカハ}こそ^ムて^ムかの者^{モノ}のふ^ムか^ムあ^ムま^ムか^ム
^{狂言}△ら^ムち^ム子^ムの^ムあ^ムく^ムゆ^ム△妻^ムの^ムあ^ムま^ムか^ム△それ^ムの
 出^ム産^ムゆ^ム△^{ワキササリ}△^イ△^ムあ^ムら^ムぶ^ム急^ムいで^ムその女^メと
 連^ムれて^ムま^ムり^ムゆ^ム△^{狂言}△^ム畏^ムつ^ムて^ム△^{シテ}△^ム科^ム人^ムと
 るし籠^ムめ^ムられ^ムゆ^ムよ^ムの女^メまで^ムの^ム罪^ム科^ム
 の餘^ムりに^ム御^ム情^ムあ^ムう^ムこそ^ムゆ^ム△^{ワキササリ}△^ムか^ムた^ム女^メ

さても母が夫の清次。今夜牢を破
 り失せぬ。夫婦の事おれべ知らぬ
 事のあるまじ。まづすぐて申しゆへ
 もとより^{シテサラリ} 躰^{イヤ} 引きおれぬ。我が身
 の助かりゆとてそ喜びゆべけれ。わら
 はよふかくともやさずゆ程に夢に^{捨テル心}
 も知らずゆ^{ロキキ強ク} さらか行と申すとも

知らぬ事あるまじ。まづまづ落右
 のあらん程夫の代りに牢者^{シヤ} をせそ
 の^{ト上} 在^カ 所^ノ とた^ラ さん^ト ^{拍子合} 今^ノ の女^ヲ
 引き立て^キ 今^ノ の女^ヲ を引き立て^キ
 急ぎ^イ 牢^ノ 志^ヲ 又^シ あ^ラ ず^ベ べ^シ と^モ 也^ナ 也^ナ 也^ナ
 け^ハ 且^シ 夫^ノ 人^ノ 心^ノ 情^ヲ 却^シ と^モ 思^ハ 入^ル とも^モ 殺^ス
 害^ハ の^ハ 科^ガ とも^モ 適^レ 得^ル ぬ^レ 報^ノ の^ハ 強^ク ぞ

^{シテウキ}何故狂氣するぞと承^{カレ上}る人の心の
^{ナク}荒^{キヤウ}らへ風の狂^{サレユル}する故もあるべし。
^{サリ}況や僧^{カウ}老^{ラウ}同^{トウ}穴^{ケツ}と契^{ツル}りし^{ツマ}も行^キ
^ツか知らずで残^サる身^ミまでも道^{ミチ}せだま。
^ツあ^ス後^コ安^{ヤス}からぬ牢^{ラウ}の中^{ナカ}思^シの周^{チウ}のせ
^{早^{ササ}ツ}んかたあさるよお^サは狂^{キヤウ}の反^ハ僻^{ヒキ}事^{コト}か
^ツげにげよ^ツまのわかれ牢^{ラウ}者の思^シ一^{ヒト}方^{カタ}

^{ナク}あらぬ身の歎^{ナゲキ}に物^{モノ}は狂^{キヤウ}人は理^リあり
^{トコロ}さうあからら^ツら^ツら^ツに^ツまの^{ツマ}あり^{トコロ}前^{マエ}と
^{ナク}知らせむ^ツか^ツて^ツ呼^ヨび^ツま^ツわ^ツて^ツ後^コの^{ツマ}牢^{ラウ}より
^ツ出^デた^ツす^ツべ^ツし^ツま^ツわ^ツす^ツぐ^ツに^ツ中^{ナカ}し^ツゆ^ツへ^ツ引^ヒれ^ツぬ
^{オホセ}作^{ツク}ら^ツぬ^ツ覺^カえ^ツぬ^ツもの^{ツマ}か^ツな^ツた^ツと^ツひ^ツま^ツの
^ツあ^ツり^ツ前^{マエ}と^ツ知^チり^ツた^ツれ^ツぬ^ツと^ツあ^ツら^ツや
^ツま^ツと^ツ失^シふ^ツべ^ツし^ツか^ツそ^ツの^{ツマ}上^ウま^ツの^{ツマ}あ^ツり^ツ前^{マエ}と。

カシ軽ク

夢うつつにも知らぬものぞ早カル上優サラリしき

女のいひ事ハナヒコトがなとハナヒコトまつから牢ラウの戸ド

開ヒラまヒラさヒラやヒラこれヒラまでヒラそヒラとヒラくヒラ出ヒラてヒラよヒラ

御志ミコシのミコシありミコシがミコシたミコシけミコシれミコシどもミコシまミコシにミコシ代ミコシれるミコシ

この身ミミあミミれミミべミミこの牢ラウの内ウチとミミはミミ出ミミづミミ

まマやマこれマてマそマかマたマみマよマあマつマかマりマやマ

無ム軟ニやニ种タかタまタのタ身ミにミ依ヨりヨたヨるヨ牢ラウのラウ

○小謡

拍子三合

上月ウツキ

無ム軟ニやニ种タかタまタのタ身ミにミ依ヨりヨたヨるヨ牢ラウのラウ

うウちチらラちチおオつツまマづヅやヤ雨アメのノ夜ヨのノ盡ツキまマぬヌ名ナ

疎スをヲ悲カしシまマ西セ楼ロにニ日ヒ落トらラてテ花ハのノ

回ウもモ添ソひヒ果ケてテぬヌ契キをヲ落トまマ燈トのノ

疎スりリてテこコがガるル影カゲはハつツかカりリまマわワがガ身ミ

ハハカカハハ。言コト語ゴ道ミチ新ニかカるル優ヤサしシきキ事コト

こコそソのノはハねネこコのノよヨのノ夫ウツ婦メとトもモにニ助タくク

るルぞゾとトくク出デてテ依カへヘかカほホとトてテ情ナまマしシまマ

やうにもおつて慰め候へシテ鼓の聲シテ
 も音に立て地あぐ地の音地の行地
シテ相浦のうらやシテ相皇女英シテ諫鼓シテ若むシテ
シテすこの鼓シテ引つもあやあつシテわシテ
シテ鼓の聲も時シテりてシテ鼓の聲も時シテりシテ
シテて日シテも西シテ山シテに傾シテけシテバシテ夜シテの空シテも追シテつシテ
シテくシテ六シテつシテの鼓シテおシテたシテうシテよシテ又シテ五シテつシテの鼓シテの偽シテのシテ

〇〇〇
〇〇〇
〇〇〇

シテ契シテあシテだシテあシテるシテ妻シテ環シテのシテひシテきシテ離シテれシテりシテくシテ
シテいシテかシテ神シテかシテどシテとシテくシテ思シテひシテねシテのシテわシテはシテらシテやシテはシテ
シテらシテおシテたシテうシテよシテやシテわシテらシテやシテはシテらシテおシテたシテうシテよシテ
シテ四シテつシテの鼓シテの世シテの中シテにシテ四シテつシテの鼓シテの世シテの中シテにシテ
シテ意シテとシテ事シテもシテ恨シテとシテ事シテもシテあシテきシテ習シテ白シテ
シテあシテらシテびシテひシテらシテりシテ物シテの思シテはシテらシテ九シテつシテのシテ丸シテ
シテつシテのシテ夜シテ半シテにシテもシテあシテりシテたりシテわシテあシテらシテ高シテしシテ

わがまの面影に立ちたり。身代に立ちてこそ二世
の世もあふべけれ。この牢出づる事
あらど。あつかりのこの牢やあらあつ
かしのこの牢。この上の坂傍の橋も
初見あれ夫婦共に助くるぞ早とく
出でゆくべにこの上のつれづれとて御
儀

つよもあらど。まことつまのあり前筑
前の宰府にあら人あれをまたへ行
きてやゆらん。くも隠さず申し
たり。去かも今年ゆ種が親の十三年
に當りたれは科ありとても助け毎
の松浦の川や西の海。かの國近
ま。極樂の。は陀誓の誓かや科

巻八

七

と助くる憐みのつあら有能の御意
 甲キリ^{キリ}ヤカハサリ^{ヤカハサリ}ヤカして時を移さずヤカして時
 を移さずヤカして時を移さずヤカして時
 とのめぐりに降りおて。結ぶ契の末
 久は松浦のりや二世の縁げはあり
 がたき心か丘げは有能き心か
 中^中下^下

錦戸

概説

別能一卷ノ五

義経頼朝の不興を蒙り、奥州に落ち下りて秀衡に身を寄せぬたが、秀
 衡の歿後、其の長子錦戸太郎は父の遺言に背きて義経を討たんとし、
 弟なる泉の三郎を語らひしも、三郎は義を執つて動かず、反つて兄を
 諫止して相分れぬ。三郎は主君の運命窮まれるを知り、妻を落さんと
 せしも妻は一人逃るゝことをなさずして自害し、三郎は兄太郎の
 討手を一身に引受けて奮戦の末、持佛堂に入りて自刃し果てけり。

此曲前ハ多少心持アルモ重クナラス様ニ諒フベシ

役別	装束	東	附	季	所
ワキ 錦戸太郎	梨子打鳥帽子 白鉢巻 着附厚板 直垂上下 込大口 袴帯 小刀 扇			四	陸中贈次郡衣川泉城
シテ 和泉三郎忠衛	梨子打鳥帽子 白鉢巻 着附厚板 掛直垂 白大口 袴帯 小刀 扇 物着ニ梨子打鳥帽子 掛直垂脱キ 白鉢巻 太刀持			月	
ツレ全 妻	面連面 髪 髻髪帯 着附摺箔 唐織着流シ 但シシテノ年配 ニヨリ面、色取合セ変ヘルアリ			曲柄	
後ワキ 錦戸太郎 従者三人	梨子打鳥帽子 白鉢巻 着附厚板 白大口 法被 縫紋腰帯 太刀佩 弓矢持テモ			(目番五四)	
後ツレ 藤原泰衡	梨子打鳥帽子 白鉢巻 着附厚板 白大口 縫紋腰帯 則次 太刀佩 長刀持			(目番二零)	
後ツレ全 (立衆) 三人	白鉢巻 着附厚板 白大口 縫紋腰帯 太刀佩			級	

錦戸

宮増景作

早錦戸内 強ク確カリ

カヤウにハ者ハ奥町の位人秀衡が
 子に錦戸の右郎にてハサテも頼
 朝義經御中不和にあらせ給みに
 より判官殿の親にてハ者をと御頼
 あり。これまで御下向ハ同頼まれ中
 しの許に。出運の盡きアセ給み

にも親にての志空しくなりてのその
 際にわれらをも迎つづけ。君も心腹
 中すあつと堅く申しつけ金おせよ
 せよ。ゆもつともその儀違ふあく
 の所にていかたる志の中し佐やらん。
 われら君も心腹中す由と聞し
 めし。日々に出仕中すとも入るも更に

に対面もあつた。このよは力及ぬ
 事とあじの所よ。頼朝より御教書と
 あつた。急ぎあつた。と度々仰せ
 られ。程に恭衛われら同心。さや
 頼朝へあつた。定めての。未だこの由
 と三男泉の三郎にて。さびの。唯今
 泉が館に行き。かやうの事とも談

合ガせざやとぬトゆいヒラカハかに案内申し候

シテ忠衛用ウケ誰ナニにて候りゆぞ 果ワキが来りてゆ

シテ心持ココロ田タか 此方へ御出でゆへ。さて唯今の御出

ゆ何のためにてゆぞ さいゆ唯今来る

事餘の儀にあらす。さてもわれら日

がに出仕申しゆども。更には対面も

あゆ問このよハカ及チカラぞぬ事とぬ

じゆ所。頼朝より帝教書とあされ。

急ぎの来れよの御事にてゆ程。恭衛

われら同心。ばや頼朝へ来るべきに定

めてゆがゆ分の何とが思ひ給ひゆぞ

シテウウチチ雨雨カカ 作畏つて承りゆひぬ我が君も人の

申しあへて。一旦の御恨事にてこそ

ゆらぬ。その上は遠言の事にてゆ問。

た思しめし御止りゆ入 ヲキカシキサナリ 申す事なる
 事なれどもさうながらわれら他門入集
 らぶこそ其の入口もあはげれ同じ主
 君に仕へし事何の苦うゆまなごた
 同心一終入さよ シテ困カセ持シ いか頼朝への忠告
 我が君の奉公にあはべからずその上
 今まで頼まれ申すま君に心とすま

の互の論の概ろの カハス 及だぬ事あれば
 られまてありや今のちや兄と思ふあ弟
 ともへん事さうにあはま シテ 度敷
 とまつて錦戸の帰る心ぞあさまし ト
 ま帰る心ぞあさまし ト シテ 言徳道
 断の事にてゆものかま カ まつ妻に
 てゆ者と呼び出。この事と申し聞

たる思しめし御止りの人 フキカシラサナリ 申す事なる
 事なれどもさうなからわれら他門入集
 らぶこそ其の入口もあはげれ同じ主
 君に仕へて事何の苦うゆべきなごた
 同心ドウシン 終入シマ といニテ 頼朝への忠義チウギ
 我が君の奉公にあらべからずその上
 今まで頼まれ申す主君に心とすま

欠

かこぞやとあじゆらかに渡りゆか
何ツレ女サリ
事にてゆぞ シテ用カニ まづ此方へ渡りゆへ沈ンデきて
も我が君の由運こそ来たあらせ給
ひてゆ ツレサリ 神が君の由運の末に
あらせ給ひたるは何ゆゆしなる御
事にてゆぞ シテ用サニ 式ゆ我が君に對面あま
事と錦戸恭衛守人会に思ひ兄弟

こや敵とあり。まづも同ひせよと宣
ふもまづ安きてもは察せよ。今
まで頼まれ申す主君に心と引ま
かへて親の送言背かん事。弓矢
取つての恥辱なるべし。さればある詞
に曰く賢人二君に依らず。貞女兩
夫にまゐえずと 拍子三合 此の理を聞
く

錦戸

六

時^{トキ}の男女^{オトコメ}に^シよるま^ニ。や^ト珠^{ツル}に^シる馬^{ウマ}
の家^{ウチ}に^シ生^ナれ^シ二^ニ人^ニの^シ主^{ヌシ}君^{キミ}に^シは^シい^カ
で^シか^シ法^{ホウ}へ^シか^シさ^シん^ニ。や^ト何^ニと^シ申^{マウ}す^ニそ^レ果^ノ
同^{ドウ}心^{シン}せ^シぶ^シる^ニ事^{コト}と^シ錦^ニ戸^ト春^{ハル}衝^{ツキ}を^シ念^ニ
に^シ思^{オモ}ひ^シ唯^タ今^{イマ}討^{ウチ}手^テに^シ向^ムか^シす^ニか^シ
あ^ラら^ハ何^ニも^シあ^ラや^シ。果^ノが^シ事^{コト}は^シ親^{オヤ}の^シ
遺^{ユイ}言^{ゴン}に^シて^シの^シ程^{ハジ}に^シ一^{ヒト}足^{タビ}も^シ落^オつ^シる^ニ事^{コト}の^シ

ゆ^ユま^マ。不^フ覺^{カク}と^シス^ニん^ニえ^シん^ニも^シ口^{クチ}惜^シし^シ
け^ケれ^レど^シ御^オ身^ミの^シ何^{ナニ}方^{カタ}へ^シも^シ御^オ悪^{アク}び^シゆ^ユへ^シ
げ^ゲに^シげ^ゲ又^{マタ}敵^{テキ}の^シよ^ヨせ^セあ^ラる^ニら^シか^シに^シ心^{ココロ}の^シ猛^{マウ}
く^クも^モ女^メの^シ身^ミに^シて^シゆ^ユへ^シば^シ思^{オモ}ひ^シま^シら^シ
せ^セ強^{ツヨク}ひ^シた^シる^ニ。御^オ身^ミの^シ障^{サマ}り^シも^シあ^ラる^ニべ^シ
ま^マあ^ラり^シ。ま^マら^シま^マら^シづ^シわ^ラら^シは^シも^シか^シく^シも^シ
自^ジ害^{ガイ}に^シ及^{およ}び^シゆ^ユべ^シ。御^オ心^{シン}安^{やす}く^シゆ^ユ境^トん

御心

中

一置きて討死崩ス心なされぬへシテ用カニ確カリげに
 けあげある云事か女さうらば自
 害ガイも及び終入ツレカル上サラシりてゆとて心
 強ツクくも夕日の影シテカッテの西に向ひて
 我ワと合せ上同用カニ仏ホトケ助け終入と
 祈念ネガハシしてキ助け終入と祈念して心
 強ツクくも自害ジガせんと思ひ定めたるヤラ

○小説

夫婦イコトウフウの身ミこそ哀アハレなれ甲その時トキ腰ウシ
 刀カと抜き持イちて立ち寄りヨリわれも
 これにて腹ハ切キらん御身ミも自害ジガ
 終入ツクへば刀カを受けウケりて胸ムネの
 あたりあたりにつツきたてトよろろよろろと倒タ
 れレ伏フせければ泉イハヒの死シ骸ガハに取トりつ
 まマて泣ナく中より外ソトの事コトぞあアま泣ナ

綿

トフ^中ト^{用ル心}外^事の事ぞあま^い。物着

後^{手強クサラリ}キ一^{ツヨク}上^{拍子ニ合ハズ}

藤^ノ波^ノか^ハね^ル松^ノ指^とば^瓦や^よ
さ^らう^テ教^すら^んい^かに^泉の^三郎^ノ
た^しか^に聞^け。水^の送^さま^まに^流る^る
も^のか^頃送^送二^列舎^ノの^境に^迷ひ^われ
と^その^身と^失ふ^ふあ^り恨^と更^み
思^ふべ^から^ず壽^帝に^腹切^り珍^入

シテ^河カ^ンテ^確カ^リ

何^錦戸^ノの^討手^とや^ワキ^カケ^テ

シテ^中カ^キウ^確カ^リ

あ^ら珍^しや^いて^りぞ^對面^ヤさ^ん

と^物の^具取^つて^肩に^掛け^大お^お
刀^おつ^とり^ん櫓^にあ^かり^大音^揚げ
て^名告^るや^う君^親二^つは^二體^の
義^君と^重ん^ど親^子の^孝行^賢
人^を雙^のろ^う取^る。却^つて^とか^くの

泉の少しも騒がすして固より好む
 大老刀を柄長におろり延べて多
 勢が中に割つて入りつゝ左右りに
 合ひつけて鑄と削つて就ひける
 へびくると進める武者の甲の眞
 向ちやうと討ち引く老刀にて諸膝
 かけず流れてかわたしと倒れてどう

と伏すシテサシ用メ今イのイれイまイでイありイさイまイそイめ
 妻も待つらんものせといで追つ
 かんカとカまカまカにカ物カのカ具カ取カつカてカカ
 こコにコ投コげコ捨コてコ日コ真コ念コせコ持コ佛コ堂コの
 床ユの上ユにユ走ユりユ上ユりユ争ユ去ユにユ近ユへユ給ユへ
 と腹ハ十ハ文ハ字ハにハかハまハ切ハりハ床ハよハりハもハ轉ハ
 びビ落ビちビけビるビとビ敵ビのビつビはビもビのビ折ビり



著者作權所
顧慙不許

大正拾年四月拾五日印刷
同 年四月二拾日發行

訂正著作者 廿四世

觀世元



發行所兼

檜

常之

助

京都市上京區三條通麩屋町東北

發行所

檜

大瓜



京都市神田區錦町二丁目拾番地

印刷所

江

川

堂

京都市四谷區傳馬町貳丁目

重あつて。追つきて行くこと。衰
あつて。追つきて行くこと。衰

録所

十一

一九一

終